事例報告

「高校生のための学びの基礎診断」実施に向けて取り組んできたこと
～高等学校教育の質保証を目指す観点から～

報告者▸　三浦　隆志（岡山県立林野高等学校校長）

ご紹介いただきました三浦でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

最初に、今年の７月に、岡山、広島、愛媛を中心とした西日本豪雨におきましては、大変な被害を受けました。本校もグラウンドが完全に浸かりまして復旧にかなりの時間を要したこともありましたが、全国の先生方から多大な励ましのお言葉等を頂戴しました。この場をお借りし最初にお礼を申しあげたいと思います。誠にありがとうございました。

さて、本日は、「高校生のための学びの基礎診断」の実施に向けて取り組んできたこと、ということで、50 分ほどお話をさせていただきます。お配りしています「レジュメ・資料集」にはハンドアウトを載せています。本日のスライドには、別のものをたくさんくっつけておりまして、ハンドアウトの方は、また見ておいていただければと思います。内容については変わりありません。

（スライド３）大学入学共通テストの試行調査が２回行われて、どうなるのかなと、興味津々に見ているのですが、私は日本史の教員ですので、11 月の３連休にこんなことを考えていました。これわかりますか？私のスマホで撮った写真ですので、少し見にくいですね。夜中に撮ったものです。平成 30（2018）年 11 月 23 日（金）23 時 50 分頃でございます。これを撮ったのは新大阪なのですが、大阪地方のこの日の天気はくもり時々晴れ、気温 18℃でした。60 歳の教師が、ホテルに向かって 800m ぐらいの距離を時速５kmほどで歩いていました。数字がたくさん出てきますよね。旧暦では 10 月 16 日でございます。そこで、問いでございます。「日本史のM先生が平成 30 年 11 月 23 日の夜に夜空を見上げスマートフォンで撮った写真です。日本史選択のみなさんに何を伝えたかったのでしょうか。」という問いを考えてみました。この中にも日本史の先生がおられますから、わかる方もおられるのではないかなと思います。数字をきちんと読み解きさえすれば、ちょうどこの日が旧暦の 10 月 16 日という情報が読み取れて、日本史、満月ということがわかれば、わかると思います。今の新しいテストでも、いろいろな情報が出てきますが、子供たちがどのようにその情報を取り出して、うまく頭の中で整理できるかが問題になっています。うなずいておられる方はこれですね。

（スライド４）『小右記』でございます。藤

原実資の日記の中で、1,000年前に、藤原道長が、自分の３人目の子供が入内するにあたって詠んだ歌です。「此の世をば我が世とぞ思ふ望月の虧たる事も無しと思えば」。これを見て「道長が栄華を誇っている」と応える子が一番多いと思いますが、この後ろに書いてありますね。「余申して云ふ。御歌優美なり。酬答するに方無し。満座只此の御歌を誦す可しと」。本当は目上の人が歌を詠めば歌を返すというのが貴族のルールでございます。ちょっと国語ができる子であれば、「それを思うと、返さなかった実資はどうなのだ」という子も出てくると思います。

常日頃から、この類の話を本校の教員にも話していて、先日の職員会議でもこの話をしました。「確かに道長の歌は教えるけれども、生徒たちがどのような形で情報を取ってこられるかということをこれからは考えなければいけない」と、そんなことでございます。こういう話を毎月していますから、教員たちはうんざりしているだろうと思いますが、「校長先生、次は何の話が出てきますか？」と、期待はしてくれている者も若干はいるようでございます。

（スライド５）私が勤めている林野高校というところは岡山県のちょうど北東部にあります。県下では小さい方の学校だろうと思います。１学年の定員は140人です。140人は満たしておりませんが、この美作地域にある公立の唯一の学校ですので、就職から難関大に至るまで様々な形で取り組まなければいけない学校でございます。

（スライド６）200人定員ぐらいの時期がずっと続き、大体、今から10年ぐらい前、2009年までは定員充足率が増えたり減ったりしながらうまくいっていましたが、実は2010年を境にうまくいかなくなり、これがずっと続いています。この間、働いている教員たちはいろいろなことをしてきましたが、それらがばらばらに野に散らかっているような状態で、そのような中、私は３年前に赴任しました。

（スライド７、スライド８）実際に取り組んでいることをまとめると、ハンドアウトに落とした通りでございます。「総合的な学習の時間」は全国的にも注目いただいているようですが、課題もあります。さきほど市川先生のお話の中にも出てきた、ＩＣＴの話では、単焦点のプロジェクターがあり、教師の説明に使っておりますが、昨年あたりから、生徒が主体的に使えるツールとしてノートＰＣを各自に持たしているという状況でございます。時間が限られていますが、少しだけ学校の様子を見ていただきます。

《ビデオクリップ視聴》

（スライド９）地元のケーブルテレビ局が定期的に撮りに来てはこんな番組を地元で流すという、そういうケースであります。

（スライド10）「高大接続」と「高校生のための学びの基礎診断」が繋がっていくのは、私個人において2004年と2010年にあったと考えています。2004年は、この『希望格差社会』です。小論文を指導されている方は、ご承知の通り、この話が出てきて、社会のあり様ということを考えるようになりましたし、余談ですが2003年には「総合的な学習の時間」が高校で始まった年です。そのような中で、高大接続の在り方というか、大学入試の在り方を考えていたときに、ちょうど８年前になりますが、この高大連携教育フォーラムにはじめて参加しました。こちらにおられます荒瀬先生と北海道大学の佐々木先生が登壇されていて、会場とお二人が丁丁発止のやりとりをされていました。「えっ、こんなにことが進んでいるのか」と、自分自身で自覚するようになりました。その後、管理職として、様々な場に参加する中で、全国では、高等学校教育の質保証ということが盛んに言われていました。スライド（スライド10）の

真ん中ですが、ちょうどその年にあった普通科校長会の冊子が校長室にありましたので、引っ張り出してみると、たまたま荒瀬先生の発表が掲載されていて、「あっ、そうだったんだ」と、読んで思ったところでございます。ですから、私自身も高大接続のことや質保証の話を考えるのは約10年弱でございます。

（スライド 12）これは皆さま方ご承知の資料だと思いますが、学習改善のための研究開発事業ということで、今回の事業「高校生のための学びの基礎診断」があります。

（スライド13）国は認定ツールを提供し、高校では、「社会で自立するために必要な基礎学力について、各学校がそれぞれの実情を踏まえて目標を設定し、教育課程を編成。多様な測定ツールを活用しながら生徒の学習状況を多面的に評価し、指導の工夫、充実を図っていく」という、これが大元です。私自身も確かに、新テストが入るから、３年間の研究指定が来るからということで認定ツールを使うわけですが、テストだけを矮小化するのではなく、生徒の学習状況をどのように改善しながら評価し、よりよくしていくのか、ということです。本校では、困ると必ず「ちょっと原点回帰してみよう」と言ってこの議論に立ち返ります。

（スライド14）県内では、もう一校、岡山工業高校が研究指定校になっています。

（スライド15）とにかく、高大接続改革を推進するため、「『基礎学力の着実な定着』とともに、『高校生の学習意欲の喚起』を目指し、『高校生のための学びの基礎診断』の導入検討等について取り組む」。先生方には、「ＰＤＣＡサイクルを確立しましょうよ」という話が一番腑に落ちてもらえました。困った時期の話をしましたが、10年ほど前から、授業改善をやろうと、様々なことをやってきましたが、どうしても単発に終わっていました。「この先生はすごいね」とか、「授業公開をしましょう」と取り組んできたわけですが、属人的になってしまっていました。そこで、「ＰＤＣＡという形でどうやって回していくのかを考えることがやはり大元ですよ」と、整理し直しました。

（スライド 16）３年間やってきたことは正にこのようなことです。１つは「ＰＤＣＡサイクルの構築」です。そして、学習指導要領が改訂される中、「資質・能力」が全面的に出てきて教育が大きく変わっていくということを先生方に伝えながら、同時並行で、「チーム学校」という言い方ではありますが、その「資質・能力」を意識してもらうための取り組みを進めてきました。今年は、「ＰＤＣＡサイクルの構築」と「資質・能力を育成する学校の仕組作り」との枠の仕切りがありませんが、これまでやってきたことをやってみようというのが今年のモードであります。

最初に、この「資質・能力を育成する学校の仕組作り」の話をします。いろいろなことをしていると、「先生、そんなにいろいろなことをしていると、お忙しいのではないですか」という話が出てくると思います。確かに新しいことを取り入れるときはハードルが上がるので大変ですが、例えば、若い教員が新しいことを実践し、ベテランの教員がそれを取り入れて効果が出るなど、「チーム学校」として、みんなで取り組むことによってハードルを下げていく、ということを少しずつやっていくしかないと思っています。劇的に変えると必ず反動が来ますから。

（スライド 17）そこで、何点かまとめました。まず、「先生方への授業改善への提言」です。授業改善に取り組んできた先生方に、何を伝えるかということです。「もう授業改善はやっています」「授業改善シートとしてこういうものがあります」と言いますが、「このようなことを考えたことはありますか」「授業が変わるということはこういうことではないですか」と、次のようなことを職員会議で話しました。

（スライド20）「授業を変える３段階がある

のではないか」ということです。まず、「出会うこと」。いい先生の授業は絶対に存在します。授業者だって、実践報告だって、理論だってあります。次に、「自分で実践してみること」。「試みる」です。そして最後は、「自分で披露してみることです」。これらはやはり言い続けなければいけません。しかしながら、やって評価される、ということを先生方に体験してもらうと、そのハードルは少しずつ低くなっていきます。

（スライド24）２番目に「授業評価の復活」です。どの学校でもされているかと思います。昔、本校でも授業評価を行っていましたが、担当されていた先生が亡くなられて、そのノウハウが一回途切れてしまいました。途切れたものをもう一度復活させて、より意味のある授業改善につなげようと、年に２回、授業評価をおこなっています。質問項目は８項目で、このスライド（スライド24）にある通りです。「学習のめあて」が示されているか、身に付けたい力を意識できているか、意欲的に取り組めるような工夫をおこなっていると感じるか、知識・技能を確実に修得できているか、というような項目で生徒に評価してもらいます。

実は今年から、教科のカリキュラム・マネジメントを促すために、９番目と10番目の設問を新たに設けています。

（スライド 25）１学期の評価結果を少しだけお見せします。レーダーチャートにするとこうなります。見たらわかると思いますが、質問１から質問５はよくふくらんだチャートになっています。しかしながら後半の質問についてはまだ少し厳しいということが見て取れます。もちろん、ふくらみが大きいからこの先生はいい先生だと言うつもりは毛頭にございません。生徒の正直な評価ですから、例えば、右下の化学基礎では、注文が書かれていますが、そのままをお返ししています。校長がそれをみて評価するのかというと、私は「そうかなぁ」と思うだけです。自分の目で見に行って、あとで「こうすると、もっといいですよ」という話しかしません。このレーダーチャートを見ていただくと本校の今の特徴が見えると思います。ちょうど後半の質問６～８あたりがやはりまだ努力が必要なのでしょう。

（スライド26）３つ目です。赴任してから２年目に、いい授業とは何か、授業をどうデザインしていくかということで、取り組んでいるのが、このＩＣＥモデルというものです。

（スライド 27）実はなんでもよかったのですが、「一番取り組みやすいのは何だろうか」「理論的に何かあるだろうか」と探していたときに、本校の教員がこの土持ゲーリー法一さんのＩＣＥモデルを見つけてきました。広島県の先生方はこれをやられています。「真似てみよう」と、実際に広島県の高校にお邪魔をして、ＩＣＥモデルでやっている授業を見せてもらいました。それを参考に、実際に数学の教員や生物の教員がＩＣＥモデルを使って授業をやり始めてみると、多少、生徒は変わるなという手応えがありました。

（スライド28）ＩＣＥモデルは、要するに評価モデルです。少し難しいのですが、「Ideas」「Connections」「Extensions」という３つの評価段階に分かれます。知識・理解、どちらかというと「問い」という、質問かもしれません。右上に書いていますが、最初は、「関ヶ原の戦いは何年ですか？」と質問し「1600年」という答えが返ってくるというように、どちらかと言うと覚える、という段階です。先ほど市川先生から意味付けの話がありましたが、では、覚えたことをどう意味付けるかという段階が、次の「Connections」です。２番目の問いは、意味付けが少し大きすぎると思いますが、「江戸幕府は260年間も続いたのはなぜですか？」という問いで、知っている知識をどのように重ねられるかということです。そして「Extensions」の段階です。「江戸幕府が財政危機です。あなたが老中ならどうしますか？」という問いです。

みんながＩＣＥモデルっぽく行っているだけかもしれませんが、このことを意識するようになってから、先生方の授業における問いのレベルは上がっていきました。なかなかうまくできない先生もいますが、できる先生に従っていき、「問いをどのように考えたらいいのだろうか」と考えながら取り組んでくれています。これはまだまだ継続しています。

（スライド 31）４つ目が、先ほど少し申しあげましたノートＰＣの活用です。

（スライド 32）たまたま地元の自治体から協力を得られるという話があり、Google の検証研究に参加することになり、Chromebook というノートＰＣを導入しました。「iPad ではないのですか」という話が出て来ると思いますが、ノートＰＣにした大きな理由はキーボードが必要だと感じたからです。ある若い教員が「生徒は英語ができない。スマホの時代だから、あいうえおの入力しかできない。ブラインドタッチなんてできない、無理だ」とノートＰＣの導入に反対しましたが、生徒は軽やかに使い、すぐにできるようになりました。また、Chromebook を導入した大元の理由はＣＭＣという管理コンソールをもっている点です。生徒がノートＰＣを使っている状況が把握できたり、例えばアプリを一斉にダウンロードしたいときにそれが全てできたりするような管理コンソールを持っています。iPad だと、この管理コンソールがかなり高いことがわかったこともあり、Chromebook を選びました。

（スライド 33）このように、生徒は普通に、Chromebook を使っています。これはプレゼンをしているところの様子です。

（スライド 35）このように、Windows に近いアプリが全て入っています。例えば文書作成の「ドキュメント」や Excel にあたるような表計算もあります。Microsoft のソフトとほぼ互換性があるので、普通に使っています。「ハングアウト」を使って、他校の人や海外の学校とのやりとりや web 会議も普通にできます。もちろんプレゼンもできます。授業では、「Classroom」を活用し、電子上のクラスを作りそこでやりとりをさせています。

（スライド 37）時間がありませんので、ビデオは割愛します。

（スライド 38）ＰＣの機能がありますから、YouTube 経由で解説ビデオの視聴ができたり、共同編集もできたりします。後で少し説明します。Chromebook を使って宿題を提出したり、添削指導をしたり、Speaking のトレーニングもできます。我々の業務として、スライドの右上に書きましたが、会議資料等を電子化しました。職員会議では、各自はこのノートＰＣだけを持っていて、紙は見ません。また、アンケートやミニテストをおこなえる「フォーム」という機能もあり、いろいろなことを試している段階です。

（スライド 39）「Classroom」と「フォーム」だけ少し話をします。

（スライド 40）共同編集機能です。教員が５人ほどで集まって、共同編集で作成した跡形が変更履歴に残っています。誰が何を入力したかが全てわかりますので、「共同編集で作ったものを、後で評価するときにすごく楽だ」と言っています。

（スライド 41）「Classroom」ですが、このスライドは宿題に関する生徒と教員のやりとりです。教員が「(今日授業でやったことを踏まえて、) あなたは山菜をとるために、ある山に入っています。･･･」ということを書いて、生徒が返してきたというケースです。この宿題は文字のみですが、画像や音も入れることができます。冒頭に申しあげましたが、豪雨災害のときに、一週間ほど、電車が不通になって学校に来ることができない子供たちがいました。その子供たちのために、この「Classroom」に授業をアップしていました。

（スライド 42）これは「Forms」で、いわゆ

るアンケートです。スライドの左側は教頭が働き方改革の一環でおこなった調査です。右側はＳＳＦという土曜日講座をできますか、という調査で、このような調整もすぐできます。先ほど、授業評価のレーダーチャートをお見せしましたが、この「Forms」でアンケートをとると、アンケート結果がExcelの形の「スプレッドシート」にすぐ落ちますので、それをExcelにすぐコピーするだけで、すぐに作れます。

（スライド43）「ＯＰＰＡ」であります。これも取り入れている学校が多々あるかと思います。

（スライド 44）山梨大学の堀哲夫先生がこの本を書かれて一気に広がったのですが、本校では理科、数学、国語、地歴といったほとんどの教科でやっています。

（スライド45）これは両面用紙の表面です。学習する前は、このようにほとんど書けていなくても、学習した後はこれぐらい書けるようになっています。ただしこれは、比較的よく書いている子のケースです。

（スライド 46）裏面はこのようになっています。「授業のタイトル」が、いわゆるその日の授業の目当てです。生徒は授業終わりにわかったことを書いていきます。疑問に思ったことや質問もここに書き、教員が回収しコメントをします。そして、次の授業というようになります。定期テストのときには生徒はこれを見返して復習しているようです。

（スライド47）これは数学のケースです。数学もこのような形で書いています。

（スライド48）こちらは「新学習指導要領の道筋」についてです。先生方に、どのように「資質・能力ベース」ということを頭に入れていただくかと、２年間にわたって展開してきました。具体的には、どのような力を付けたいのかという「育てたい生徒像」について、策定まで約１年半かけて、いろいろな議論、また、ワークショップをしながら考えてきました。「重点目標を立てて、全員で考えていこう」というところから始まっています。

（スライド 49）ですので、本校の教員は全員、この「育てたい生徒像」がわかっていて人に言える、というところでございます。

（スライド50）昨年度末にこのような、学校のグランドデザインを作りました。これは横浜国立大学の高木展郎先生のグランドデザインをモデルにして制作したものです。ちなみに、岡山県では今、違うものを作っています。スライド下の、「学校生活の基本（何ができるようになるか）」→「教育課程の編成（何を学ぶか）」→「教育課程の実施（どのように学ぶか）」→「学習評価を通じた学習指導の改善（何が身についたか）」というサイクルの部分が一番大切です。

（スライド 52）今年度に入ってからは各教科や学年団で、具体化したグランドデザインを策定して、このサイクルに取り組んでいます。これは１年次のグランドデザインです。「今年の 12 月末に年度のまとめをしましょう」ということで、「カリキュラム・マネジメント」をしていく予定です。

（スライド 53）国語はこのようなサイクルになっています。

（スライド54）実際の授業の様子ですが、あまり時間がなくなってきましたので、お見せしたいところだけをさっとお見せします。

《ビデオクリップ視聴》

これは国語の授業です。これが普通です。先ほど市川先生のお話にもありましたが、いろいろな子にとって、グループ活動をすることで、確実に力がついていっていると思っています。

（スライド55）「Chromebook」を使うとこういう様子になります。

《ビデオクリップ視聴》

これは化学の実験の授業で、まず宿題で実験動画を見るところから始まります。実験をした後にデータをグループで共有し、「スプレッドシート」に実験の値を入力しているところです。そして「Forms」を使って、授業の振り返りをしている様子です。

《ビデオクリップ視聴》

これは、国語の教員が意見を集めるために、「Classroom」を使って意見を集めているところです。感想共有です。話したり黒板に書いたりすることもあるのですが、ＰＣに入力してみると、このような状況が見えるわけであります。次いきますね。

（スライド 56）ついこの間おこなった体育の授業です。「保健体育の宿題は実現するか」という裏テーマを作りました。バドミントンの単元です。バドミントンの授業ですから高く打ったり、ネットすれすれに落としたりすることに段階的に取り組んでいきます。事前に、前の授業のことを宿題として「Classroom」で送り、内容を確認してきてもらいます。「今日やることはこういうことですよ」と、ちょうど左上の写真ですが、もう一度、今日の課題を確認します。そして、「それをするためにはどのような術があるか」と、中央上の写真のように４つの中から自分たちのグループができるものは何かを選ばせます。ラインギリギリに落とすために、このようなもの（スライド下の写真）を使うなど工夫しながら取り組んでいき、生徒が最終的に記録して振り返り、次に向けてどうしていくかを考えていく、といったことをしています。

「高校生のための学びの基礎診断」の教科は英・数・国ですが、学校を挙げて、知識・技能を習得させるだけではなく、どのようにしてそれらを活用し、うまくみんなとやりとりをするか、ということをやってきました。

（スライド 57）このようなグラフはあまり出さないのですが、生徒の学力は、よくはなっていっています。

（スライド 58）私たちはどちらかというと、学習方略の工夫が段々と進んでいくことがよいと思っています。学習内容を理解するための自分なりの学習方法があるという子が、学年が進むにつれて、どんどん増えているというところに、手応えを感じています。

（スライド 59）ここまで話をさせていただいて、最後のところ、課題に入りますが、ハンドアウトの内容から少し変えています。ＰＤＣＡサイクルでは、新しい学習指導要領で各教科の見方・考え方が提示されました。その中で、「授業改善はただ授業を変えることだけではなく年間計画を構造的に作成する」とか、「本校の生徒に付けたい力はこういうことだ」と先生方で議論し策定し、「ＰＤＣＡを回していくにはこうだ。構築していくにはこういうことだろうか」ということに繰り返し取り組むことです。結果として、当然、生徒たちが、主体的にどんどん勉強していってくれればいいわけですが、「生徒に基礎学力の定着をどう実感させるか」など課題はまだまだ残っています。文科省の研究開発事業は今年度で終わりますが、このＰＤＣＡサイクル構築の部分については何らかの形で続けなければいけないなと思っています。２番目は、「学校全体の取組」です。もちろん、働き方改革の話を言われる方がこの後会場の中から出てくるかと思います。「先生、そんなに一生懸命にしたら大変なことになるでしょう」。確かにそうです。大変な部分もありますので、残業時間を減らす取り組みもして、実際、少し下がってきています。残業時間は、昨年に比べて 12％減りました。質を下げずに簡単にできることは「Chromebook」を使って簡単にしようとすることなどが成果かなと思っています。そして、３番目です。これは、口がすっぱくなるほど本校の教員に言っているこ

とですが、テストありきではないということです。とにかく、学校全体において、自分の目の前にいる子供たちにどのような力をつけるのかということです。そして、「高大接続の観点から学習改善、授業改善を推進していくしかないよ」と言いますが、これもまだまだ詰めていく必要があると思います。そういう中で、今日は市川先生から重要なご示唆をたくさんいただきました。私自身、生徒の学びの中心は「探究」ではないかと思いますし、我々自身も探究のマインドを醸成して、実践していく必要があるのではないかと思っています。

（スライド 60）何かＰＤＣＡ構築のことを考えて困っているとき、やはり肝は、「本校の生徒に付けさせたい力はどういうことか」ということです。もちろんアセスメントをしますが、基礎学力の定着の実感ということについて、生徒も、我々も含めて、どのようにすればいいのかを求め、共有していくことが大切なのだろうと思います。

（スライド 61）ある校長先生から聞かれた話です。「先生、学びの基礎診断は、どれをしたらいいのですか」「何をしたらいいのか、よくわからないんですよ」と言います。でも私は答えを言いません。「○○○○の基礎診断は受けていますが、Ｄゾーンがちっとも減らない。１年から２年になると酷い状態になるんですよ」と言いますが、私は何も答えません。「テストの話をしてるんじゃないんだけど」と思って聞いています。最後に、「県教委も何かやれって言うでしょうからね」と、全然オチにも何にもならない話です。ですので、我々が真摯にやってきたことをどのようにきちんと県内で報告するか、広げていくのかということが、大事だと思っています。

（スライド 62）最後の「探究」ですけれども、これは市川先生が言われる通りだと思います。「特定の形を普及させるということではなく」。これは、「論点整理」の中に出てきますが、「子供たちがこうした学びを経験しながら、自信を育み必要な資質・能力を身に付けていくことができるようにすること」と書かれています。これは正にそうだと思っています。学校教育ですから、もちろん授業だけではありませんし、学校行事もあります。また、部活動もあるわけですから、そのような学校の教育活動総体で考えていく必要があるわけです。

（スライド 63）そして、「習得・活用・探究という学習プロセスの中で、問題発見・解決を念頭に置いた深い学びの過程が実現できているかどうか。新しい知識や技能を習得したり、それを実際に活用して、問題解決に向けた探究活動をおこなったりする中で、資質・能力の三つの柱に示す力が総合的に活用・発揮される場面が設定されること」。これが、我々が「探究」に向かうところだろうと思います。

（スライド 64）趣旨説明で、荒瀬先生がキャリア教育の定義という話をされましたが、これもまた引っ張ってきました。中学校の学習指導要領と高校の学習指導要領の、「探究の時間」と「総合的な学習の時間」の差を見てみると、目指しているものが見えてきます。高校では、「自己の在り方生き方を考えながら、よりよく課題を解決し発見し解決していく」。中学校であれば「よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていく」。この違いはやはり大きいと思いますし、そう考えると、このキャリア教育の定義の中で、いつも私はこう思っていますが、「一人一人の社会的」というように「社会的」と書いてあることが、非常に大きな意味を持っているのだと。特に高校においては、もちろん「職業的自立」ということが意識されなければいけないところはありますが、やはり社会の中で子供たちがどう生きていくのかというところを我々は考えていく必要があるだろうと思っています。

（スライド 65）そういうことを考えたゆえに、「探究」とは、教科・科目の「探究」と「総

合的な探究の時間」、そして、「生きる力」の一つの部分が特別活動における「探究」だと思っています。それらをうまく教育活動・教育課程の中に落としていって、現在できることから少しずつがんばって、「生きる力」をどうやって高校生に付けていくのかが大切なことではないかと思っています。

（スライド 66）おわりにあたって、本校はこの４つの柱で動いていきます。「Chromebook」にしても「ＩＣＥモデル」にしても話し出したら一時間ではとても足りません。もし何かあればお問い合わせをいただければと思います。

（スライド 67）最後に、この会場には大学の方がたくさんおられると思いますので、勝手に私が考えていることをお伝えして終わろうと思います。入試のところで、「高大接続」というように括弧にしてしまうのは適切な表現かどうかわかりませんが、高等学校、いわゆる中等教育から高等教育になり社会に出て行くというように、この矢印の形で何となくつながっているわけですし、最近出てくるようなキーワードを全部挙げてみました。大学では、「３つのポリシー」という言葉や、「ＩＲを活用して、どのように学生たちを育てるのか」ということも言われ、「社会ではどうだ」という話になっていきます。よく大学の先生と話をすると、「新卒一括採用が通年採用になっているよね」というところで、「いやこれってもう境目ないぞ」と感じます。実は今日のような会に出てきて先生方と議論をしていくと、正にここが高大接続なのだと思います。高等学校と、いわゆる高等教育の学校群ともっと密接な形でつながっていき、最終的に入試のあり様の話になるのかなというように思っています。

（スライド 68）最後でございます。予告ですみません。来年（2019 年）の２月６日でございます。今日の話にデータを付けて、私ではなく担当者がきっちり報告をするという最終報告会を本校でやろうと思っております。もし興味・ご関心があれば、本校のＨＰで間もなく公開されますので、よろしくお願いしたいと思います。

どうもありがとうございました。

スライド１

「高校生のための学びの基礎診断」実施に向けて取り組んできたこと

～高等学校教育の質保証を目指す観点から～

岡山県立林野高等学校
校長　三浦隆志
E-mail:takashi.miura1958@gmail.com

スライド２

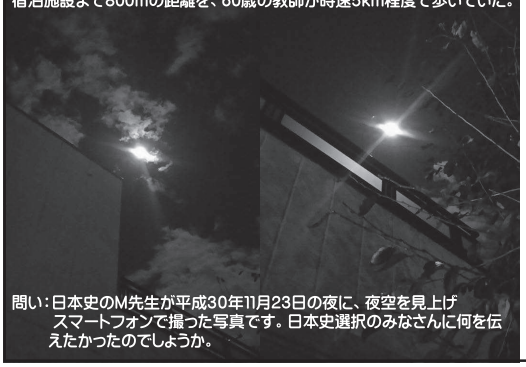
本日の内容

0,はじめに
1,岡山県立林野高等学校の特徴的な教育活動
2,高大接続改革における
　「高校生のための学びの基礎診断」とは
3,林野高等学校の取組
4,到達点と今後への課題
5,終わりにあたって

スライド３

私が十一月の三連休に考えた問い

平成30（2018）年11月23日（金）　23時50分頃　満月：月齢15.3
（旧暦10月16日）
大阪地方の11月24日（土）の天気→くもり時々晴れ、気温18℃
宿泊施設まで800mの距離を、60歳の教師が時速5km程度で歩いていた。



問い：日本史のM先生が平成30年11月23日の夜に、夜空を見上げ
スマートフォンで撮った写真です。日本史選択のみなさんに何を伝えたかったのでしょうか。

スライド４

『小右記』
（寛仁二年十月）十六日乙巳、女御藤原威子を以て皇后に立つる日なり。前太政大臣の第三の娘なり。一家にして三后を立つ、未だ曾つて有らず。……太閤下官を招き呼びて云ふ、和歌を読まんと欲す。必ず和すべし者。答へて云ふ、何ぞ和し奉らざらんやと。又云ふ、誇りたる歌になむ有る。但し宿構に非ず者。此の世をば我が世とぞ思ふ望月の虧たる事も無しと思えば。余申して云ふ。御歌優美なり。酬答するに方無し。満座只此の御歌を誦す可しと。……

【注釈】
『小右記』：小野宮右大臣藤原実資の日記
寛仁二年：一〇一八年
女御：天皇の侍妾の一つ。この当時は、皇后に次ぐ地位だった。
前太政大臣：藤原道長
三后：道長の長女彰子が一条天皇の中宮、次女の妍子が三条天皇の中宮になっていた。
太閤：藤原道長
下官：作者（藤原実資のこと）
宿構：あらかじめ作る
余：藤原実資のこと
酬答：うまい返歌、という意味
満座：みんなで
誦す：唱和する

スライド５

0、はじめに

岡山県立林野高等学校とは

創立110年目の単位制の普通科高校
津山市を中心とする美作学区の最も東にある
1学年定員：35人の4クラス、140人

	男子	女子	計
1年	66	72	138
2年	57	55	112
3年	71	58	129

美作市HPより

＜進路状況＞

	H29.3	H30.3
国公立大学	16	21
私立大学	46	66
公立短期大学	0	0
私立短期大学	9	5
専門学校	32	31
就職	8	11
その他	6	0

主な進学先
岡山大学、京都教育大学、鳥取大学、島根大学、
山口大学、静岡大学、香川大学、徳島大学、高知大学、
鹿児島大学、岡山県立大学、中央大学、明治大学、
早稲田大学、関西大学、立命館大学、京都産業大学、
ND清心女子大学など

スライド６

入学定員と入学者の推移

	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007
定員	200	200	200	200	200	200	160	160	160	160	160
入学	200	200	200	196	196	200	152	160	137	137	160
%	100	100	100	98.0	98.0	100	95.0	160	85.6	85.6	100

	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
定員	160	160	160	160	140	140	140	140	140	140	140
入学	150	160	130	113	96	126	124	136	134	112	138
%	93.8	100	81.3	70.6	68.6	90.0	88.6	97.1	95.7	80.0	98.6

→2009年までは、定員の充足率は周期的。
→2010年以降、定員を充足していない。

スライド７

1、岡山県立林野高等学校の特徴的な教育活動①

【特徴的なカリキュラムと授業改善】

生徒の進路に合わせた5類型の教育プログラム

「みなさか学」や「作家の時間」などの学校設定教科・科目

現行学習指導要領を踏まえた授業改善や評価の研究（平成23年～）

文部科学省、「高校生の基礎学力の定着に向けた学習改善の
ための調査研究事業」の指定（平成28年～平成30年）全国で20校

【総合的な学習の時間（My Dream Project）】

地域をフィールドにした課題解決学習
現在はver2（平成23年～）

→「テアイ場」「むかし倉敷ふれあい祭り」「実践報告会」などの
特徴的なプログラムに実践

平成30年1月11日　キャリア教育に関する
文部大臣表彰を受賞

スライド８

1、岡山県立林野高等学校の特徴的な教育活動②

【グローバル人材の養成】

・ローカルとグローバルな観点からの人材育成
H22～「総合的な学習の時間」（マイドリームプロジェクト）による探究型の地域課題解決学習の推進
H25.12 ユネスコスクールに認定
→それまでのESD活動が認められる。H26にユネスコスクール世界大会高校生フォーラム（岡山）が開催
～H28 地域のNPOと協働して、インターナショナル テイ キャンプを開催

・海外修学旅行の実施
H24.6　初の海外修学旅行（韓国、ソウル市紫雲高等学校と交流）
H26.6　初の台湾修学旅行（台湾、台北市立内湖高級工業職業学校と交流）
H28.6とH29.6　台湾の台北市　私立台北中興高級中学校と交流

・海外の学校や諸機関等との交流事業
H28.10　対日理解推進交流プログラム2016で、80名の中国の高校生が来校
H29.11　外務省幹部職員による国際理解講座（本校）
H30.12.10～　対日理解推進交流プログラム2018　ASEAN派遣で、16名をタイに派遣予定.

・姉妹校提携と交流の取組
H29.10　校長が国立台南第二高級中学と台南市立大灣高級中学を訪問
H30.2　国立台南第二高級中学と台南市立大灣高級中学との包括連携協定を締結（於：台南市）
H30.7　国立台南第二高級中学と台南市立大灣高級中学に生徒を派遣
H30.12.18　国立台南第二高級中学と台南市立大灣高級中学の生徒が教育旅行で本校を訪問予定

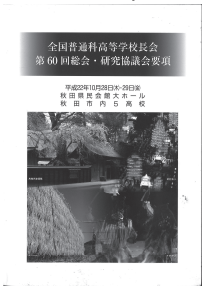
【ICT機器の利活用】
H22　全クラスに単焦点プロジェクターを設置
H28.6　GoogleからChromebookの実証研究を打診される（→環境整備に着手）
H29.3～　Chromebookの実証研究を開始（Google・NTTドコモ・林野高等学校による）
H29.10～　GoogleのChromebookを教育活動全般に導入

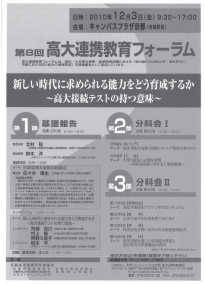
スライド９

スライド 10

2、高大接続改革における「高校生のための学びの基礎診断」とは

2004年　2010年





「格差社会」が流行語
になる。

内容を一部紹介すると

（2003年、高等学校で
「総合的な学習の時間」が始まる。）

スライド 11

2、高大接続改革における「高校生のための学びの基礎診断」とは

平成20年10月～
『高等学校段階の学力を客観的に把握・活用できる新たな仕組みに関する調査研究（北海道大学）』
平成22年5月25日　経過報告の提示
平成22年9月30日　最終報告書の提出

http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/itaku/08082915/__icsFiles/afieldfile/2010/11/04/1298840_1.pdf

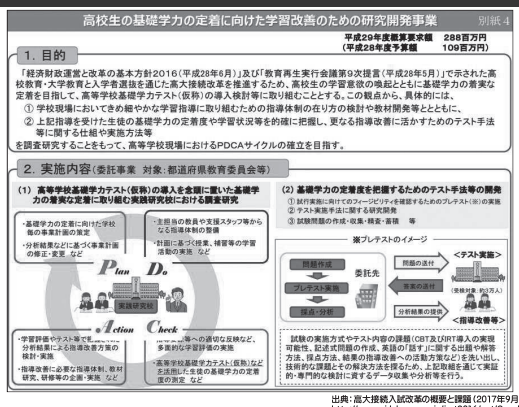
『平成22年度全国普通科校長協会 第60回総会・研究協議会』冊子（平成22年10月22日、秋田）

＜研究協議題＞
【4】高等学校教育の質の保証と高大接続の在り方
高校基本問題検討特別委員会　委員長　及川良一先生（当時）の報告
・高等学校教育における「質の保証」
・望ましい高大接続の在り方→高等学校側と大学側がそれぞれ取組むべきこと
高等学校・大学双方が取組むべきこと
・高大接続テスト（仮称）の在り方

【3】高校教育の質保証を考える
京都市立堀川高等学校　校長　荒瀬克己先生（当時）の報告
・新学習指導要領（現行の学習指導要領）の総合的な学習の時間
・高大接続テスト（仮称）
『調査研究（北海道大学）』の報告書から
「高大接続を可能とする普通教育を再構築し、知識基盤社会を支えるには、高大の教育上の接続を保証するための高校段階での客観的な学力把握の仕組み＝「高大接続テスト（仮称）」が必要である。」

スライド 12

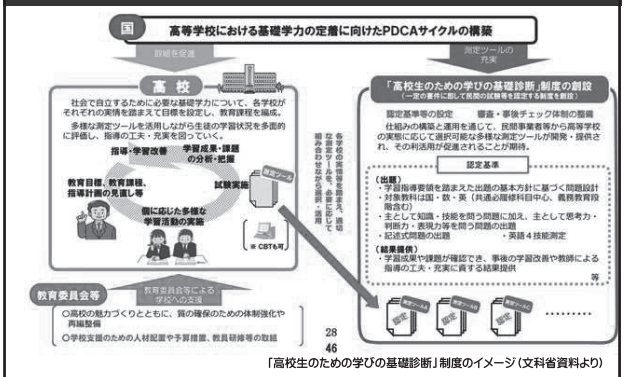
2、高大接続改革における「高校生のための学びの基礎診断」とは



出典：高大接続入試改革の概要と課題（2017年9月）より
http://www.al.lab.uec.ac.jp/art2016/ppt/Suzuki.pdf

スライド 13

2、高大接続改革における「高校生のための学びの基礎診断」とは



「高校生のための学びの基礎診断」制度のイメージ（文科省資料より）

「高校生に求められる基礎学力の確実な習得」と「学習意欲の喚起」に向けて
「民間の測定ツールを活用」しながら、「高等学校においてPDCAサイクルの構築」を目指すための制度

スライド 14

2、高大接続改革における「高校生のための学びの基礎診断」とは

平成31年度から実施予定の「高校生のための学びの基礎診断」

※「高校生のための学びの基礎診断」は、高等学校教育の質保証を目指した施策の一つ。中央教育審議会の高大連携システム会議の最終答申を受けて、実施を予定。

↓

文部科学省による「高校生の基礎学力の定着に向けた学習改善のための 調査研究事業」に林野高等学校や岡山工業高等学校など全国で20校が指定（平成28～30年度）

スライド 15

2、高大接続改革における「高校生のための学びの基礎診断」とは

■調査研究事業の制度目的（文科省資料より抜粋）

高大接続改革を推進するため、「基礎学力の着実な定着」とともに、「高校生の学習意欲の喚起」を目指し、「高校生のための学びの基礎診断」の導入検討等に取り組む

- ✓ 指導体制の在り方の検討や教材開発等
- ✓ テスト手法等に関する仕組みや実施方法等

を研究することをもって、

高等学校現場におけるPDCAサイクルの確立を目指す

↓

研究指定校はPDCAサイクル確立に向けて先行研究を実施

スライド 16

3、岡山県立林野高等学校の取組

	PDCAサイクルの構築	資質・能力を育成する学校の仕組作り（新学習指導要領への道筋）
H28年度	実態の生徒の把握 →課題 「主体的な学びに乏しい」 「学び続ける意欲が乏しい」 →授業評価を復活させる →「OPPAシート」の導入普及	「チーム学校」のスタート →振り返りをWorkShopで 1学期末：KPT法を用いて全員で振り返り 3学期　：新1年のLHRを企画する 2017年度の重点目標を産み出す →「教職員」全員での取組へ
H29年度	教師の「発問力」の向上 →「ICEモデル」の研究・導入 →Chromebookの導入	「チーム学校」の展開 2学期：「育てたい生徒像」の策定 ミドルリーダーによるWorkShop 「教職員」全員でのWorkShop 3学期末：グランドデザインを策定
H30年度	研究テーマ 「生徒が主体的に深く学ぶ力を育成するために教師の発問や評価等について研究する。」 →3年間で育てたい資質・能力を明らかにする。 →資質・能力ベースで年間指導計画を作成する。 →教師の発問力の研究は継続。 →評価方法や「指導と評価の一体化」等について研究する。	

スライド 17

3-1、岡山県立林野高等学校の取組

先生方への授業改善への提言

授業評価の復活

ICEモデルの研究

GoogleのChromebookの導入

GoogleのG Suite for Educationの展開

OPPAシートの活用

スライド 18

教育の大きな転換点（グレート・リセット）の時代（当時の会議資料）

キーワード：主体性・多様性理解・協働性・創造性など

取り組むテーマ：教育の質保証、授業のアクティブラーニング化、ICT機器、主権者教育など

全てを包括することは何か？

- 学び続ける人を育てること＝「アクティブラーナー」の育成

学びとは、
脳神経系の可塑性を生物学的な基盤にして、「変わる」こと。換言すれば、学ぶ前と学んだあとには、行動に変化が生じて、はじめて、「学び」なのです。

スライド 19

教育の大きな転換点（グレート・リセット）の時代（当時の会議資料）

そのように考えると

「転換点にある私たちは、 変わろうとしていますか。」「生徒には、「学べ、変れ」と迫っていますが、 教員自身は、変わろうとしていますか。」

「変る」ためには、これまで学んできたことを、 解きほぐして、再構成する、 「アン・ラーニング」or「マインド・セット」が必要。これには、ある意味で、「否定」が伴う。したがって、「痛み」が伴う。

そこから、「逃げてはいまいか。」「過去にしがみついて、深く穴を掘って、閉じこもっていまいか。」「変化を怖がっているのではないか。」を吟味する。

スライド 20

教育の大きな転換点（グレート・リセット）の時代（当時の会議資料）

授業を変える3段階

1）まず、「出会うこと」。
　優れた授業者、実践報告、理論に出会うこと。

2）次に、「試みる」。
　見たこと・知ったことを、
　小さなことを実践に落とし込むこと。
　そして、すこしずつ改善していくこと。

3）3段階目は、「実践を人に見せること」、人目に「さらす」。
　さらに、研究会に参加して、発表する。
　他者の評価を仰ぐ。

スライド 21

教育の大きな転換点（グレート・リセット）の時代（当時の会議資料）

さらに教育活動を豊かにするには

指導内容の再点検
　→スリム化、教材（問題集など）の再選択

教師がしゃべりすぎない授業の作り方
　→ストップウオッチで計ると驚きますが、人間関係は壊れます。

映像の活用
　→先生方の良い所を5～10分に編集

スライド 22

教育の大きな転換点（グレート・リセット）の時代（当時の会議資料）

新しい教具の活用
　→まなボード、どこでもプレゼンシートなど

授業進度を考えると、いろいろな取り組みに抵抗がある。
基本的なスキルが足らないのに、ほっておくことができない。
（対話でじわじわ解決していくしかない）
　→ 1年間を通した授業のマネジメントでの育成する視点

支援を必要とする生徒への配慮も

スライド 23

3-2、岡山県立林野高等学校の取組

先生方への授業改善への提言

授業評価の復活

ICEモデルの研究

GoogleのChromebookの導入

GoogleのG Suite for Educationの展開

OPPAシートの活用

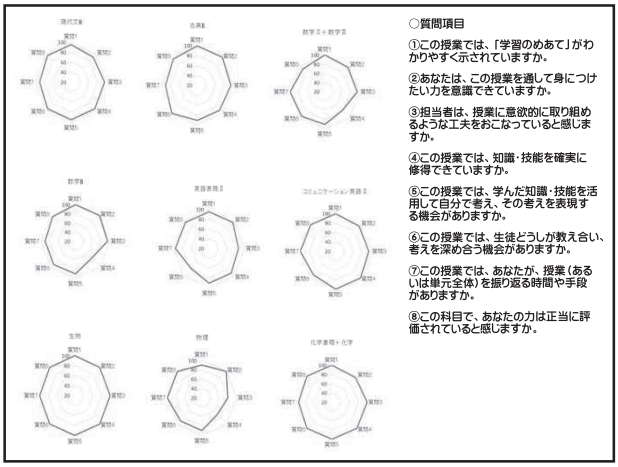
スライド 24

授業評価の復活

※授業評価アンケート（生徒対象）
○実施時期と実施方法
　毎年7月上旬と12月上旬。G Suiteアプリ「フォーム」で回答（←3年前はOCRカード）
○質問項目
①この授業では、「学習のめあて」がわかりやすく示されていますか。
②あなたは、この授業を通して身につけたい力を意識できていますか。
③担当者は、授業に意欲的に取り組めるような工夫をおこなっていると感じますか。
④この授業では、知識・技能を確実に修得できていますか。
⑤この授業では、学んだ知識・技能を活用して自分で考え、その考えを表現する機会がありますか。
⑥この授業では、生徒どうしが教え合い、考えを深め合う機会がありますか。
⑦この授業では、あなたが、授業（あるいは単元全体）を振り返る時間や手段がありますか。
⑧この科目で、あなたの力は正当に評価されていると感じますか。

→2018年度から、教科のカリキュラムマネジメントを促す問いも実施

スライド 25



スライド 26

3-3、岡山県立林野高等学校の取組

先生方への授業改善への提言

授業評価の復活

ICEモデルの研究

Googleのchromebookの導入

GoogleのG Suite for Educationの展開

OPPAシートの活用

スライド 27

ICEモデルとは

ICE（アイス）モデルとは，カナダで開発・実践されてきた評価モデルで，IはIdeas（基礎知識），CはConnections（つながり），EはExtensions（応用）を意味します。「問い」に対してどのように答えるかによって，I,C,Eのどの段階にいるかを評価する視点です。I,C,Eの段階に達しているかどうかを評価するための問いは，それぞれ異なるとも言えますが，一つの問いに対しさまざまなレベルで答えることのできるような問いができれば，より望ましいとされる。

スライド 28

ICEモデルで考えると

→教師の「問い」の力を鍛える

(2) 本質的な「問い」

1) 関ヶ原の戦いは何年ですか？
江戸幕府が開かれたのは何年ですか？

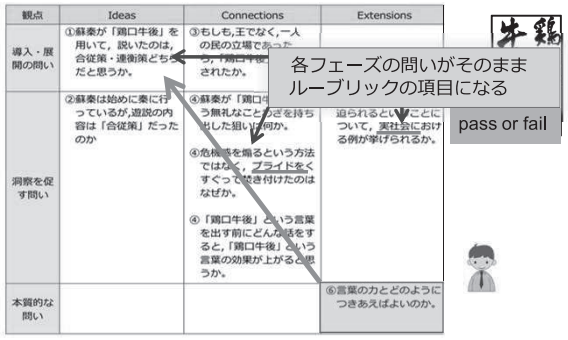
2) 江戸幕府は260年間も続いたのはなぜですか？

3) 江戸幕府が財政危機です。あなたが老中ならどうしますか？

	Ideas	Connections	Extensions
「問い」のねらい	知識・理解の定着	知識・理解等の深化	知識・理解等の統合的な活用
内容	何を意味しているか 必要性は何か	どのような視点から ものごとを見るか	どのような価値や資産を 創り出すか
目的	精緻化 他者への説明	理解の深化 自己内対話や他者との 体験の共有・協働	実効化と創造 提案、創作、貢献活動

スライド 29

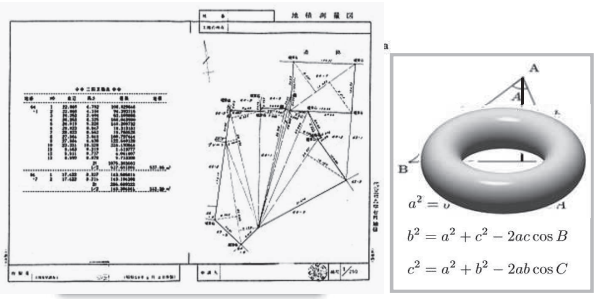
ICEモデルの国語の授業（祇園北高校の例）



スライド 30

ICEモデルの数学 II の授業（祇園北高校の例）

Ideasから始める授業（数学Ⅱ）　I → E → C



スライド 31

3-4、岡山県立林野高等学校の取組

先生方への授業改善への提言

授業評価の復活

ICEモデルの研究

GoogleのChromebookの導入

GoogleのG Suite for Educationの展開

OPPAシートの活用

スライド 32

Chromebookの導入

Chromebookとは?

学習用にデザインされ、教室で利用するように作成

非常に軽く、丈夫なノートブックで生徒用に設計

電源を入れてから10秒以内で立ち上げり、約9時間のバッテリー稼働時間

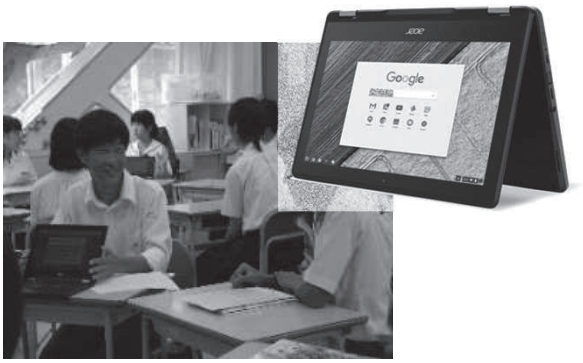
シンプルなデザイン、手頃な価格、高度なセキュリティ、共有可能な設計

Google社HPより

32

スライド 33

Chromebookの導入



スライド 34

G Suite for Education 特徴

100%ウェブ(ブラウザだけ)

データは全てクラウドに

集中管理

常に最新

Google社HPより

34

スライド 35

G Suite for Education

Classroom
・教材の掲載
・課題提示や回収
・小テスト
・アンケート

カレンダー

クラウド
※無制限

Gmail

文書作成

表計算

アンケート
小テスト

プレゼン

web会議

35

スライド 36

普通教室のICT環境整備のステップ(イメージ)

本校は
Stage4の環境へ！

Stage1
電子黒板(大型提示装置)
+
各教室PC1台
+
無線LAN

Stage2
電子黒板(大型提示装置)
+
グループ1台可動式PC
+
無線LAN
+
個人フォルダ?

Stage3
電子黒板(大型提示装置)
+
学びのスタイルにより1人1台可動式PC
+
無線LAN
+
個人フォルダ

Stage4
電子黒板(大型提示装置)
+
1人1台可動式PC(家庭負担?)
+
無線LAN等?
+
個人フォルダ

アクティブ・ラーニング

教科指導におけるICT活用

統合型校務支援システム(個人情報管理可能)

連携

引用：教育ICT教材整備指針に向けて 平成28年11月7日 文部科学省生涯学習政策局情報教育課

36

スライド 37

Chromebookのプロモーションビデオをご覧ください。

提供：美作市ケーブルテレビ
（株）みまちゃんネル

スライド 38

実践中です

・先生が説明した言葉がわからないとき
　→ すぐ調べる。
・教科書を読んでも説明がわかりにくいとき
　→ 先生の作成した解説ビデオを視聴する。
・友人と一緒に考えをまとめるとき
　→ 共同編集する。
・先生の解説したビデオを観て予習してくる。
　→ 授業では知識の活用を学ぶ。
・宿題の提出
　→ Chromebookを使って提出する。
・進路指導
　→ 大学の志望理由書の添削指導を受ける。
・音声入力機能
　→ 英語のSpeakingのトレーニング

・朝礼伝達票のペーパーレス化、共有化
・カレンダー機能でのスケジュール管理
・職員会議資料の電子化（資料の事前共有、議事録の共同編集・同時編集）
・進路検討会の資料の電子化
・アンケート、調査ごとの回収、集計の簡略化
　→フォームとスプレッドシートの連携活用
・現1年生からeポートフォーリオの実践
　→活動をこまめに記録、ドライブに格納
・新たなアプリのテストも
　ロイロノートの研修会
　ベネッセのClassiの研修会

スライド 39

Google Classroom　フォーム

- → クラスの作成
- → 課題の配布
- → 学習状況の管理
- → クラスのコミュニケーションの改善

など

- → 高度なアンケート作成
- → 小テスト作成
- → 回答をすばやく回収

スライド 40

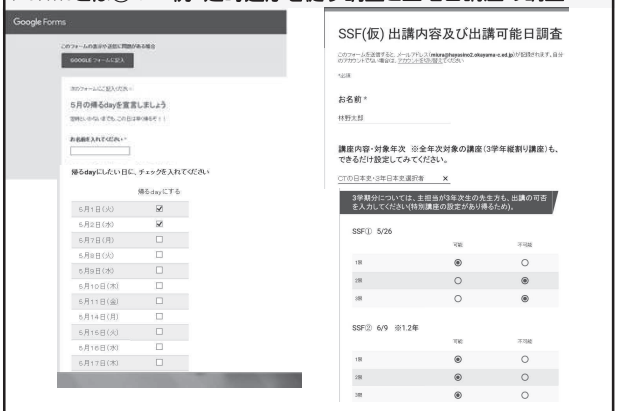
共同編集機能とは？　例：ドキュメント

スライド 41

Classroomとは？　例：生物の授業後の宿題で

スライド 42

Formsとは①？　例：定時退庁を促す調査と土曜日講座の調査



スライド 43

3-5、岡山県立林野高等学校の取組

先生方への授業改善への提言

授業評価の復活

ICEモデルの研究

GoogleのChromebookの導入

GoogleのG Suite for Educationの展開

OPPAシートの活用

スライド 44

一枚ポートフォーリオ評価について

山梨大学の堀哲夫先生の著書です。

堀先生は、小学校の理科の教科指導を研究されている方です。この著書は、高校から小学校まで汎用的な評価について書かれています。

OPPAとは学習者が一枚の用紙の中に、授業前・中・後の学習履歴として授業の成果を記録し、その全体を学習者自身に自己評価させる方法です。たった一枚の用紙を使って、必要最小限の情報を最大限に活用するところがポイントです。

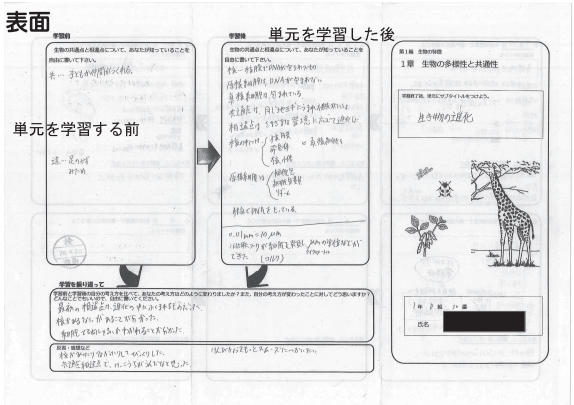
スライド 45

一枚ポートフォーリオについて

表面

単元を学習した後

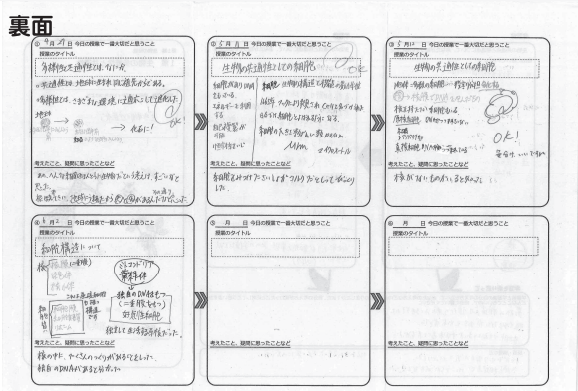
単元を学習する前



スライド 46

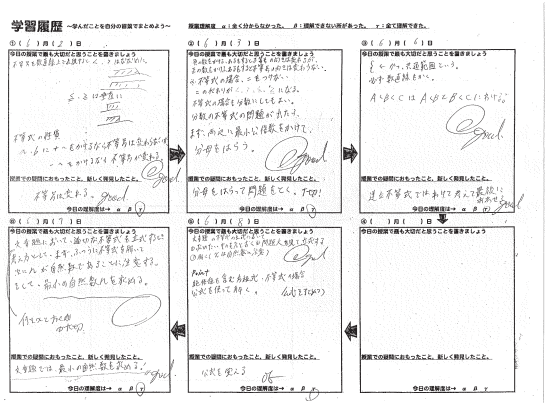
一枚ポートフォーリオについて

裏面



スライド 47

一枚ポートフォーリオについて



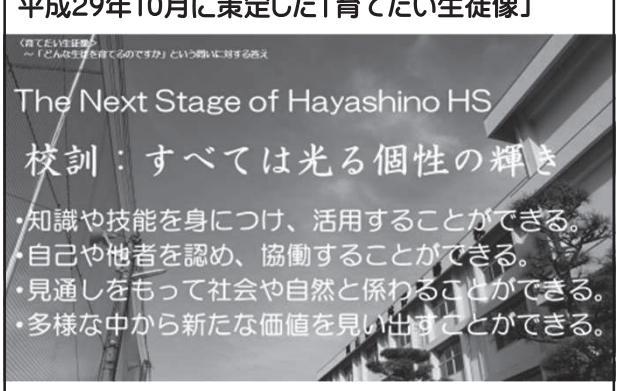
スライド 48

3、岡山県立林野高等学校の取組

	PDCAサイクルの構築	資質・能力を育成する学校の仕組作り（新学習指導要領への道筋）
H28年度	実態の生徒の把握 →課題 「主体的な学びに乏しい」 「学び続ける意欲が乏しい」 →授業評価を復活させる →「OPPAシート」の導入普及	「チーム学校」のスタート →振り返りをWorkShopで 1学期末：KPT法を用いて全員で振り返り 3学期　：新1年のLHRを企画する 2017年度の重点目標を産み出す →「教職員」全員での取組へ
H29年度	教師の「発問力」の向上 →「ICEモデル」の研究・導入 →Chromebookの導入	「チーム学校」の展開 2学期：「育てたい生徒像」の策定 ミドルリーダーによるWorkShop 「教職員」全員でのWorkShop 3学期末：グランドデザインを策定
H30年度	研究テーマ 「生徒が主体的に深く学ぶ力を育成するために教師の発問や評価等について研究する。」 →3年間で育てたい資質・能力を明らかにする。 →資質・能力ベースで年間指導計画を作成する。 →教師の発問力の研究は継続。 →評価方法や「指導と評価の一体化」等について研究する。	

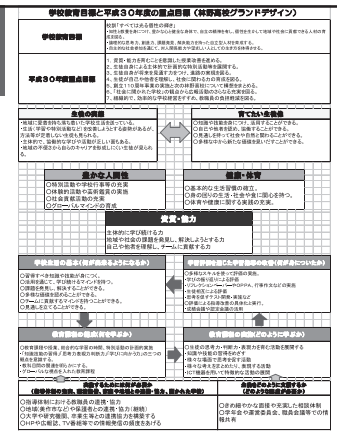
スライド 49

平成29年10月に策定した「育てたい生徒像」



スライド 50

平成30年度版 林野高等学校 グランドデザイン



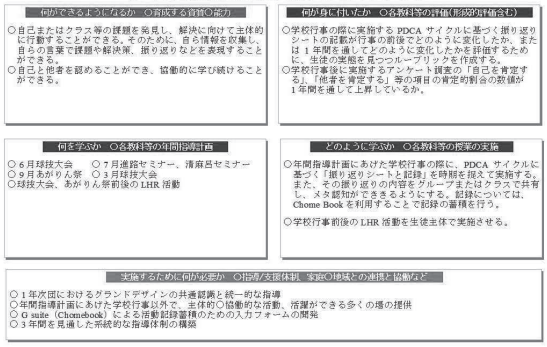
スライド 51

3、岡山県立林野高等学校の取組

	PDCAサイクルの構築	資質・能力を育成する学校の仕組作り（新学習指導要領への道筋）
H28年度	実態の生徒の把握 →課題 「主体的な学びに乏しい」 「学び続ける意欲が乏しい」 →授業評価を復活させる →「OPPAシート」の導入普及	「チーム学校」のスタート →振り返りをWorkShopで 1学期末：KPT法を用いて全員で振り返り 3学期　：新1年のLHRを企画する 2017年度の重点目標を産み出す →「教職員」全員での取組へ
H29年度	教師の「発問力」の向上 →「ICEモデル」の研究・導入 →Chromebookの導入	「チーム学校」の展開 2学期：「育てたい生徒像」の策定 ミドルリーダーによるWorkShop 「教職員」全員でのWorkShop 3学期末：グランドデザインを策定
H30年度	研究テーマ 「生徒が主体的に深く学ぶ力を育成するために 教師の発問や評価等について研究する。」 →3年間で育てたい資質・能力を明らかにする。 →資質・能力ベースで年間指導計画を作成する。 →教師の発問力の研究は継続。 →評価方法や「指導と評価の一体化」等について研究する。	

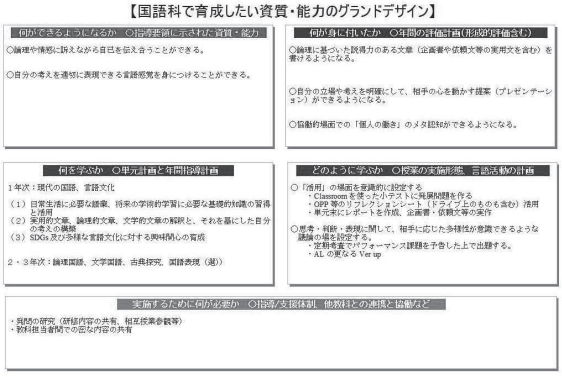
スライド 52

【1年次のグランドデザイン】



スライド 53

【国語科のグランドデザイン】

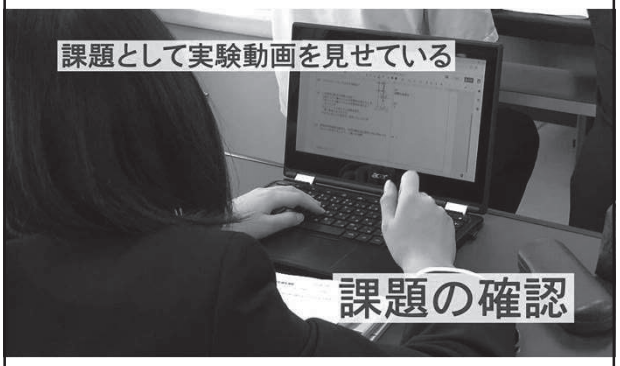


スライド 54

林野高校で展開されている教育活動

スライド 55

林野高校で展開されている教育活動



スライド 56

林野高校で展開されている教育活動

平成30年11月30日(金)3限　体育研究授業　単元：バドミントン

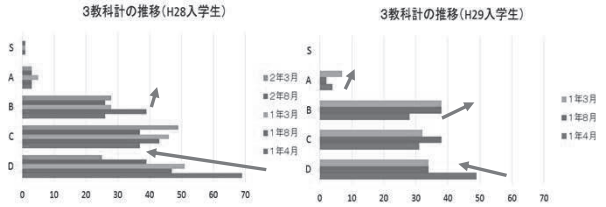
裏テーマ：「保健体育」の宿題は実現するか。

スライド 57

学習改善・授業改善の結果は？

生徒の学力と意識の変化

スタディサポート　学力GTZの推移（3教科計、人数）



※事業を通した取組で学力下位層が減少、中～上位層が増加している。

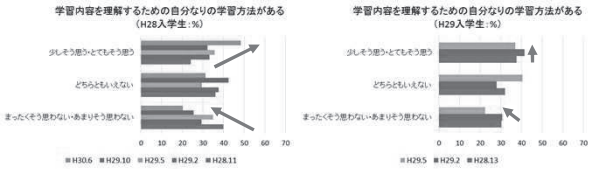
スライド 58

学習改善・授業改善の結果は？

生徒の学力と意識の変化

Hypre-QUアンケート

「学習内容を理解するための自分なりの学習方法がある」



※入学時は学習習慣がついていない生徒が半数近くを占めていたが、
学年が進むにつれ学習方法を工夫するようになっている。

スライド 59

4、到達点と今後への課題

①林野高等学校での基礎学力の定着に向けたPDCAサイクルが出来つつある。だだし、指導改善のためには今後、さらにカリキュラムマネジメントが必要。
ただし、「生徒に基礎学力の定着をどう実感させるか」など課題はまだまだ散見され、研究の継続は必要。
②学校全体の取組によって「育てたい生徒像」や「学校グランドデザイン」「教科・学年のグランドデザイン」が策定されるなど教職員の意識は揃いつつある。
③来年度からの「高校生のための学びの基礎診断」は、新しいテストの導入に矮小化するのではなく、高大接続の観点から学習改善・授業改善を推進し、学校全体の改善を図る必要がある。
④新学習指導要領では、生徒の学びの中心は「探究」になると考えている。そのように考えると、我々のなかにも「探究」マインドを醸成し、実践を蓄積していく必要がある。

スライド 60

4、到達点と今後への課題①

2.高大接続改革における「高校生のための学びの基礎診断」とは

■調査研究事業の制度目的（文科省資料より抜粋）

高大接続改革を推進するため、「基礎学力の着実な定着」とともに、「高校生の学習意欲の喚起」を目指し、「高校生のための学びの基礎診断」の導入検討等に取り組む

- ✓ 指導体制の在り方の検討や教材開発等
- ✓ テスト手法等に関する仕組みや実施方法等を研究することをもって、

高等学校現場におけるPDCAサイクルの確立を目指す

▼

研究指定校はPDCAサイクル確立に向けて先行研究を実施

「生徒に基礎学力の定着をどう実感させるか」≒「高校生の学習意欲の喚起」

→林野高校の生徒につけたい資質・能力は？
基礎学力の定着を実感できることは何か？（アセスメント含めて）
共有化？（カリキュラムマネジメント）

スライド 61

4、到達点と今後への課題③

あるK校長さんの疑問

校長：「先生、学びの基礎診断は、どれをしたらいいのですか。」
校長：「何をしたらいいんか、よく分からんのですよ。」
三浦：「・・・・・・・」
校長：「すでに、○○○○○の基礎診断は受けていますしね。」
校長：「でもね、Dゾーンがちっとも、減らないんですよね。」
校長：「1年から2年になると酷い状態になるんですよ。」
校長：「具体的には、Dゾーンがどんどん増えているんですよ。」
校長：「県教委もきっと何かやれって言うでしょうからね。」
三浦：「・・・・・・・」

→3年間の取組内容をどう他校に伝えていくか。

スライド 62

4、到達点と今後への課題④

【次期学習指導要領では】

○ このような中で次期改訂が学習・指導方法について目指すのは、特定の型を普及させることではなく、下記のような視点に立って学び全体を改善し、子供の学びへの積極的関与と深い理解を促すような指導や学習環境を設定することにより、子供たちがこうした学びを経験しながら、自信を育み必要な資質・能力を身に付けていくことができるようにすることである。そうした具体的な学習プロセスは限りなく存在し得るものであり、教員一人一人が、子供たちの発達の段階や発達の特性、子供の学習スタイルの多様性や教育的ニーズと教科等の学習内容、単元の構成や学習の場面等に応じた方法について研究を重ね、ふさわしい方法を選択しながら、工夫して実践できるようにすることが重要である。

平成27年8月26日文部科学省の中央教育審議会、初等中等分科会、教育課程企画特別部会
論点整理P20より

スライド 63

4、到達点と今後への課題

【次期学習指導要領では】（つづき）

ｉ）習得・活用・探究という学習プロセスの中で、問題発見・解決を念頭に置いた深い学びの過程が実現できているかどうか。新しい知識や技能を習得したり、それを実際に活用して、問題解決に向けた探究活動を行ったりする中で、資質・能力の三つの柱に示す力が総合的に活用・発揮される場面が設定されることが重要である。教員はこのプロセスの中で、教える場面と、子供たちに思考・判断・表現させる場面を効果的に設計し関連させながら指導していくことが求められる。

平成27年8月26日文部科学省の中央教育審議会、初等中等分科会、教育課程企画特別部会
論点整理P20より

スライド 64

総合的な探究の時間と総合的な学習の時間

探究の見方・考え方を働かせ，横断的・総合的な学習を行うことを通して，自己の在り方生き方を考えながら，よりよく課題を発見し解決していくための資質能力を次のとおり育成することを目指す。

平成30年3月告示：高等学校学習指導要領

探究的な見方・考え方を働かせ，横断的・総合的な学習を行うことを通して，よりよく課題を解決し，自己の生き方を考えていくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。　平成29年3月告示：中学校学習指導要領

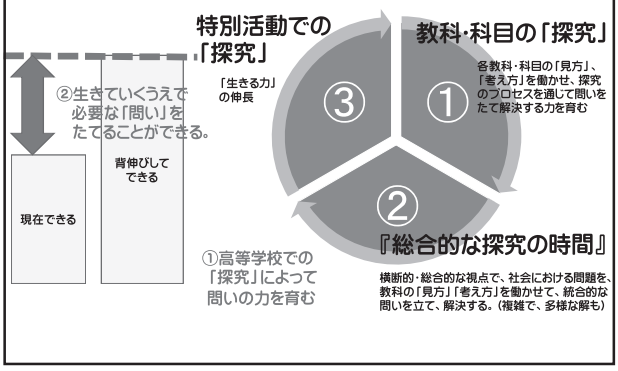
キャリア教育とは：一人一人の社会的・職業的自立に向けて、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育

平成23年1月中央教育審議会答申
「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」

スライド 65

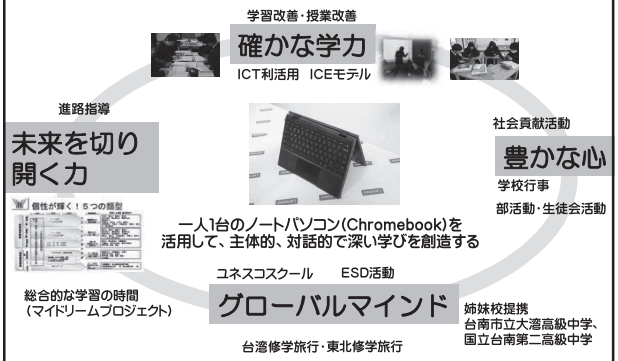
今後、高等学校では「探究」が重視される

高等学校の「探究」によって、「問い」（なぜ）の力を鍛える



スライド 66

5、おわりにあたって



スライド 67

「高」・「大」・「社」を巡って、今後、起きるかもしれないこと

高等学校　入試　大学・短大・専修学校　社会

新学習指導要領
高等学校教育の質保証
資質・能力の育成
授業改善
指導と評価の一体化
英語4技能
高校生のための学びの基礎診断
グローバル人材

入試の激変？
入試改革
・大学入試共通テスト
・英語資格検定試験
多面的評価による入試
一般・推薦・AO

高等教育の充実
大学制度改革
→「3つのポリシー」による「質」保証と評価」
IRの活用
グローバル人材

少子高齢化
グローバル
仕事の高度化
労働力不足
働き方改革

スライド 68

予告（宣伝ですみません）

平成31年2月6日（水）

「高校生の基礎学力の定着に向けた学習改善のための調査研究事業」
の最終報告会を開催します。

【会場】　本校（岡山県美作市三倉田）
【内容】　若手教師の授業公開
今回の調査研究事業の到達点と今後の課題
指導講評　荒瀬克己先生（大谷大学文学部教授）
→詳細は、林野高校のHP

スライド 69

ご静聴ありがとうございました。

平成30年12月8日（土）
第16回高大連携教育フォーラム
「高校生のための学びの基礎診断」実施にむけて取り組んできたこと～高等学校教育の質保証を目指す観点から～
於）キャンパスプラザ京都

岡山県立林野高等学校
三浦　隆志
takashi.miura1958@gmail.com